

前 畑 遺 跡  
都 南 地 区 遺 跡  
七 又 木 地 区 遺 跡  
原 田 ・ 上 江 遺 跡  
善 田 地 区 遺 跡  
八 重 地 区 遺 跡  
西 河 原 地 区 遺 跡  
角 上 原 地 区 遺 跡

昭和63年度農業基盤整備事業  
に伴う遺跡調査概要報告書

平成元年3月

宮崎県教育委員会

前 畑 遺 跡  
都 南 地 区 遺 跡  
七 又 木 地 区 遺 跡  
原 田 ・ 上 江 遺 跡  
善 田 地 区 遺 跡  
八 重 地 区 遺 跡  
西 河 原 地 区 遺 跡  
角 上 原 地 区 遺 跡

昭和63年度農業基盤整備事業  
に伴う遺跡調査概要報告書

平成元年3月

宮崎県教育委員会

## 序

農業が主たる産業である宮崎県では、農業の近代化を図るため各種の農業基盤整備事業を実施しております。事業予定地内に埋蔵文化財等が所在する例が多々あり、文化財の保護と農業基盤整備事業との調整が重要な課題であります。県教育委員会では、事業実施予定地内の発掘調査を実施し、埋蔵文化財の有無、性格、範囲等を把握し、調整に努めているところです。

本年度は、新富町七又木地区遺跡、田野町八重地区遺跡、小林市出の山地区遺跡など13ヶ所で発掘調査を実施しています。本報告書は、本年度実施した中の8ヶ所の遺跡の発掘調査の概要報告ですが、これらの成果を収めた本書が文化財の保護・活用に生かされ、また、地域の歴史研究、社会教育の場に役立てていただければ幸いに存じます。

最後に、調査にあたって御協力いただいた地元及び関係諸機関の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成元年3月

宮崎県教育委員会

教育長 児玉 郁夫

## 例 言

1. 本書は、宮崎県教育委員会が国庫の補助をえて実施した昭和63年度発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査は、宮崎県内の農業基盤整備事業に伴う遺跡の確認調査として実施した。
3. 発掘調査は、県文化課埋蔵文化財係が担当した。
4. 調査にあたっては、当該市町教育委員会、農林振興局、土地改良区等の多大な協力があった。
5. 本書の執筆、遺構・遺物の実測・製図・写真撮影等は各執筆者が行った。
6. 本書の編集は面高哲郎が担当した。
7. 出土した遺物は、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターで保管している。

## 本文目次

第Ⅰ章	はじめに	(面高)	1
第Ⅱ章	発掘調査の概要		2
第1節	前畑遺跡	(永友)	2
第2節	都南地区遺跡	(近藤)	4
第3節	七又木地区遺跡	(近藤)	7
第4節	原田・上江遺跡	(面高)	10
第5節	善田地区遺跡	(面高)	13
第6節	八重地区遺跡	(面高)	15
第7節	西河原地区遺跡	(北郷)	18
第8節	角上原地区遺跡	(長津)	20

## 挿図目次

第1図	前畑遺跡トレンチ配置図	3
第2図	都南地区遺跡位置図	5
第3図	都南地区遺跡トレンチ配置図	5
第4図	七又木地区遺跡トレンチ配置図及び出土遺物実測図	8
第5図	原田・上江遺跡トレンチ配置図	11
第6図	善田地区遺跡トレンチ配置図	14
第7図	八重地区遺跡トレンチ配置図	16
第8図	西河原地区トレンチ配置図	19
第9図	角上原地区遺跡トレンチ配置図	21

## 図版目次

図版 1	前畑遺跡 .....	3
図版 2	都南地区遺跡 .....	6
図版 3	七又木地区遺跡 .....	9
図版 4	原田・上江地区遺跡 .....	12
図版 5	善田地区遺跡 .....	13
図版 6	八重地区遺跡 .....	17
図版 7	西河原地区遺跡 .....	18
図版 8	角上原地区遺跡 .....	20

## 第I章 はじめに

農業の近代化を図るため、ほ場整備事業、農地保全事業、広域農道建設事業等の各種の事業が実施されている。本年度及び平成元年度事業実施予定地内を検討した結果、その十数ヶ所において埋蔵文化財包蔵地等が所在していたので分布調査及び発掘調査を実施した。本年度は、下記の13ヶ所で発掘調査を実施した。

調査地	所在地	調査期間	調査担当者
西川内地区	日向市大字高字西川内	昭和63年5月12・14日	近藤 協
前畑遺跡	日南市大字大窪字寺村	昭和63年5月16日～18日	永友 良典
都南地区遺跡	都農町大字川北字新別府下原	昭和63年6月7日～13日	近藤 協 面高 哲郎
角上原地区遺跡	清武町大字今泉丙	昭和63年6月15・16日	近藤 協
〃	〃	平成元年2月27日～3月3日	長津 宗重
七又木地区遺跡	新富町大字新田字七又木	昭和63年6月1日～6日 及び6月28日	近藤 協 面高 哲郎
原上・上江遺跡	えびの市大字上江	昭和63年12月12日～16日	面高 哲郎
出の山地区遺跡	小林市大字細野字十日町外	昭和63年12月19日～26日	面高 哲郎
善田地区遺跡	串間市大字西方	平成元年1月24日・25日	吉本 正典 面高 哲郎
奈留地区遺跡	串間市大字奈留字中別府外	平成元年1月26日	面高 哲郎
八重地区遺跡	田野町字乙	平成元年1月31日～2月4日	面高 哲郎
祇園原地区遺跡	新富町大字新田字曲久保外	平成元年2月15日～3月13日	面高 哲郎 近藤 協
西河原地区	新富町大字新田・西河原地区	平成元年2月20日～23日	北郷 泰道
瓜生野地区遺跡	宮崎市大字大瀬町外	平成元年3月22日～30日	近藤 協

## 第Ⅱ章 発掘調査の概要

### 第1節 前畑遺跡

#### 1. 遺跡の位置と調査の経緯

前畑遺跡は、日南市大字大窪字寺村に所在する。調査地は南郷川の支流の大窪川の左岸に広がる丘陵地の先端にわずかに開けた平坦地にある。周辺はみかん畑として開かれている。農道ををさんで北側には墓地（江戸後期以降？）が形成されており、南側には五輪塔と板碑（室町以降？）が二十数基集められている。墓の東側には寺跡の伝承がある。試掘調査は沿海南部広域営農団地農道整備事業に伴うもので、昭和63年5月16日から18日の3日間実施した。

#### 2. 調査の方法と概要

調査では、農道の南側をA地区、北側の墓地の東側をB地区、さらにその東の下段をC地区として、それぞれに試掘坑を入れて調査した。

基本の層序は農道の切り通しのA地区側で確認した。Ⅰ層～表土（50cm）、Ⅱ層～茶褐色土層（10cm）、Ⅲ層～暗褐色土層（30cm）、Ⅳ層～黄褐色土層（60cm）、Ⅴ層～アカホヤ火山灰層（10cm）、Ⅵ層～硬質暗褐色土層（20～30cm）、Ⅶ層～黒色土層となる。

**A地区** 第1トレンチではⅣ層中で近世墓を1基検出し、寛永通宝3枚が出土した。下位層まで掘り下げなかったが、表土（盛土？）中から縄文土器片2点、青磁片3点が採集された。第2トレンチではⅥ層下位からⅦ層直上にかけて焼礫が多量に出土した。第3トレンチではⅦ層直上で偏平な人頭大の川原石を含む焼礫数点が出土した。

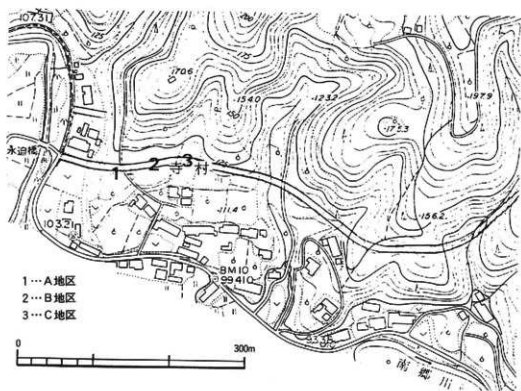
また、基本層序を確認した切り通し面ではⅦ層下位からⅦ層直上で縄文土器片2点と焼礫が出土した。

**B地区** 第4トレンチではⅣ層中で溝状の掘込みとピットの掘込みを検出した。遺物は盛土中から青磁1点が採集された。第5トレンチではⅦ層上位で焼礫数点が出土した。第6トレンチではⅤ層まで確認できたが遺構・遺物は検出されなかった。

**C地区** 第7トレンチを入れたが、表土～盛土の下には礫混じりの軟質の淡褐色土が堆積しており谷地形からの流れ込みの堆積土と思われる。

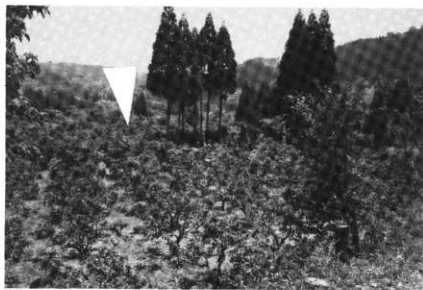
以上の結果、A地区では縄文時代早期の文化層と近世墓、B地区では縄文時代早期の文化層と中世の寺跡関連の文化層とそれぞれ2時期の文化層の存在が考えられる。C地区は丘陵の谷地形の延長線上に位置するため遺跡の分布する可能性はないと思われる。





位置図

図版 1 前畑遺跡



調査区(B地区)近景西から

## 第2節 都南地区遺跡

### 1. 遺跡の位置

名貫川下流域の平地は、西の尾鈴山系が日向灘に向かってゆるやかに傾斜する扇状地形の末端部にあたり、調査対象地はそのなかでも名貫川下流左岸の標高20~30mの低段丘上の上になっている。なかでも、最も名貫川沿いのA地区（新別府下原）は昭和62年度におこなわれた県営圃場整備に際して、五ヶ所で弥生時代中期の住居跡が確認されている。

### 2. 調査に至る経緯

都農町内では昭和58年度から平成2年完了の予定で、県営圃場整備事業（都南地区）が行われ、新田、新別府、名貫、分子村等がその対象地となっている。本試掘調査は、昭和63年度事業対象予定区について実施したものである。

### 3. 調査の概要

圃場整備対象区の全域をカバーするかたちで第1~20トレンチを設けて実施した。第1トレンチから第9トレンチ（仮称A区）は名貫川に平行して発達する南向きの緩傾斜地で現況は水田および畑地、休耕地となっており、円礫を積み上げて区画する段差の著しい耕地が続いている。この地区は先述したように昭和62年度分の圃場整備中に遺跡として確認されている地点の西側にあたり、その遺跡（集落）の一端が延びている可能性が大である。トレンチは、1.3×4mを基準として9本設けているが、T4は南北長8m、T8・9は杉林中に設定したために、長さ1.5mほどの短いトレンチとなった。今回の圃場整備対象地区は全域にわたって表土（耕作土）が極端に浅い場合がほとんどで、T1・2で約12cm、34567トレンチでも約20cmを測るだけで、以下は尾鈴山起源の流紋岩質の溶結凝灰岩円礫となる。円礫は拳大から径1m内外にも及ぶ。T1・2は約12cmの耕土下から礫層（拳大~人頭大）となり、黒褐色土の混土礫層上面よりそれぞれ、土器片（2×2cm）が一点出土している。T5・6を設定した箇所は分布調査の折に遺物が表採されている。約15~20cmが水田耕土となっており、水田基盤直上より土器小片を発掘している。T4の付近では最も高位にある。この地点の東側の畑より完形の土器一点が過去出土している。T4では約20cmの耕土下に混赤ホヤの明褐色層（約10cm）がみられ、以下はこの地点でも小礫層となっている。小礫混じりの明褐色層より、尾鈴山系流紋岩質の剥片が一点出土した。

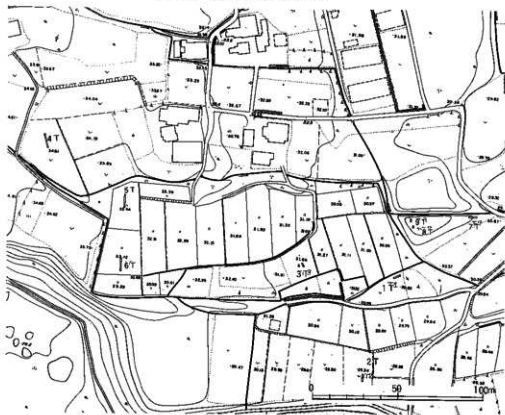
第10・11・14・15トレンチを設けたB区（仮称）は、A区の北側のやや高位（標高30m）にあり周辺を果樹園に囲まれ、東西に水路、農道が走っている。T14・15は最も現地形の残存状態が良好におもわれた竹林中に、T10・17はそれに続く畑地に設けた。T14・15はI・II層が黒褐色の腐植質土、III層が褐色土（漸移）、IV層に至って大礫混りの黄褐色粘土になるもので、全トレンチ中最も深い表土層値（約45cm）を示したが、いずれも遺構・遺物は検出されなかった。T10・11を設定した畑地においては、表面採集において打製石鏃、土錘、土器細片、輸入陶磁器（白磁・青磁）、陶磁器（国産染付）の小片が得られている。T10は

灰褐色土(耕土)下が水田基盤、以下漆黒土、黄褐色土(やや粘性)大礫混りの砂質土となり、礫層までに比較的深い土層が遺存しているがトレンチ内からは遺構・遺物の出土はなかった。第18～20トレンチを設けた調査区北端一帯は、周辺にくらべて標高の最も低い地点である。表土は極めて浅く、約9～12cmほどしかなく以下はすべて礫層となり遺物も出土していない。

以上の結果によりA区では弥生・古墳時代の遺跡がある可能性があり、B区では、縄文・弥生・中世の遺跡が所在すると推定される。



第2図 都南地区遺跡位置図



第3図 都南地区遺跡トレンチ配置図

図版2 都南地区遺跡



第3トレンチ



第1トレンチ



第6トレンチ



第6トレンチ



第4トレンチ



第19トレンチ



第18トレンチ



出土遺物(陶磁器・石鏃・土鏟)

## 第3節 七又木地区遺跡

### 1. 遺跡の位置

七又木地区遺跡は、一ツ瀬川河口近くの左岸、洪積台地（標高70～80m）上にある。当遺跡の位置する台地には円墳、前方後円墳が南縁辺部を中心に分布しており、国指定新田原古墳群域内にある。最寄りの遺跡としては、当遺跡から北東1.6kmにあって花弁状住居跡数軒を検出した新田原A遺跡や2.5km北には周溝墓・土壇墓が200基あまり検出されて注目された川床遺跡がある。

### 2. 調査に至る経緯

新富町では県営農業基盤整備パイロット事業（尾鈴・尾鈴Ⅱ地区）が実施されており、昭和56年より随時、埋蔵文化財発掘調査が行われ、川床遺跡（昭和60年）、上籬遺跡（昭和61～63年）をはじめとする注目すべき大規模な遺跡群があらわになった。七又木地区は昭和63年度に同パイロット事業を実施する計画であったので、県教育委員会が昭和63年2月に試掘調査を実施した。今回は前回調査できなかった丘陵西端部を中心として調査したものである。

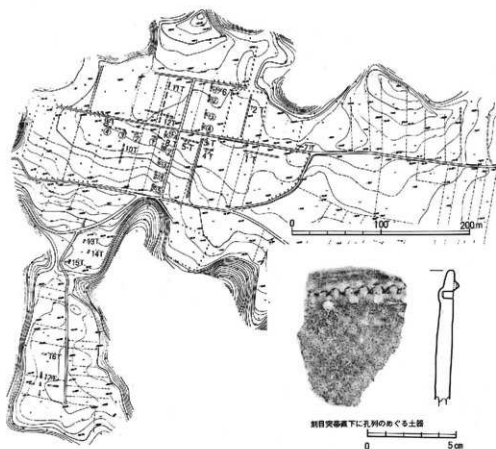
### 3. 調査の概要

七又木地区の西端、標高75mの台地約20,000㎡をA区として第1～12トレンチをこの台地から約10m下位にある南へつき出した約10,000㎡の丘陵性台地をB区として第13～17トレンチを設定して主に重機によって耕作土を剥ぎ、赤ホヤ面を検出面の基準として試掘している。

T2は幅1.5m、長さ49mの南北に長いトレンチで、トレンチ北端に住居址とおもわれる落込みがあり、土器片が3・4点出土。その南端においては柱穴約5ヶ所、その他不定形の掘り込みがみとめられた。T3では赤ホヤ面において80×100cmの正方形落込みが一間ごとに南北方向に続く。これらはみかんの植込あとであると判明。T6の②で赤ホヤ直上の黒色土中に含まれた刻目突帯に孔列のめぐる土器片が出土し、③では溝状遺構が認められた。T8～T10を設定した付近は、赤ホヤの遺存状態が悪くほとんど残っておらず、やや堅い暗褐色ブロック土を含む褐色土層で、上層を削平されているものとおもわれる。遺構・遺物を検出してない。T11・12付近は、表土下40～50cmで赤ホヤ層も良く遺存している。赤ホヤ面で観察しているが遺構と考えられる掘り込みは検出されない。T1を設定した付近はやや高まった一帯であったが、赤ホヤは残存せず、粒子が粗く粘性のない黒褐色土層となる。

T13・14・15では赤ホヤ以上はすでに削平されて残っていない。T15では二次的な赤ホヤが少し混る。Ⅱ層に円礫が入る。T16・17一带は上層が大きく削平されており、耕作土(約10~15cm)直下、粘質の明褐色土層となつてその面では、遺構検出はない。

以上、A区ではT2・6付近に弥生時代の住居址を中心とするとおもわれる遺構が認められる。B区では今回は遺構・遺物は認められなかったが、前回の試掘において丘陵南端に柱穴、弥生土器が検出されており、丘陵中央部から東半分を中心とした範囲で遺構を検出する可能性が高いとおもわれる。



第4図 七又木地区遺跡トレンチ配置図及び出土土器実測図

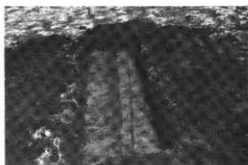
図版3 七又木地区遺跡



第2トレンチ(西から)



第1・4トレンチ(東から)



第6トレンチ



第11トレンチ



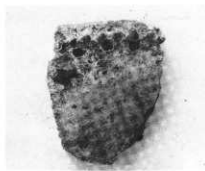
第3トレンチ(ミカンの定植跡)



第8トレンチ



第6トレンチ(柱穴・住居址)



刻目突帯直下に孔列のめぐる土器片

## 第4節 原田・上江遺跡

### 1. 遺跡の位置

原田・上江遺跡は、えびの市大字上江外に所在する、北に川内川、南に池島川の間に挟まれ、西方に延びる標高約250mの低位段丘上に遺跡は立地する。

### 2. 調査に至る経緯

宮崎県西諸県郡農林振興局では、昭和59年度より上江・池島地区県営圃場整備事業を西端の池島地区から東方に向けて実施している。それに伴い、昭和61年度より毎年えびの市教育委員会では発掘調査を実施し、多大な成果を収めている。平成元年度事業予定地内にも遺物散布地が所在しているので昭和63年12月12日から16日までの間発掘調査を実施した。

### 3. 調査の方法と概要

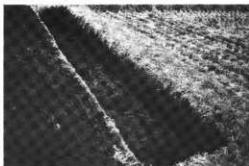
A地区：当地区は、台地南縁部にあたり西方に延びる舌状台地である。昨年度、台地付け根部に2ヶ所トレンチを設定し調査しているが、遺跡の性格等が不明であったので再度調査を行った。今回は、台地縁辺部に6ヶ所のトレンチを設定した。当地は、第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層黒色土、第Ⅲ層アカホヤ、第Ⅳ層黒褐色土、第Ⅴ層は基盤となっている暗褐色土を若干含む礫層で、台地縁辺ほど第Ⅱ層の残存は良い。第3トレンチの第Ⅱ層で縄文後期の貝殻文土器、土師器、第1トレンチの第Ⅱ層でヘラ切りの土師器坏、第2トレンチの第Ⅱ層で鎚蓮弁文青磁、黒曜石、土器等が出土した。遺構は、柱穴が第1～3トレンチ、溝状遺構が第3～6トレンチで検出されている。当地区は、縄文後期及び平安～中世の遺跡で、検出された遺構は平安～中世の時期のものである。

B地区：台地北縁部にあたり、北に延びる小谷が発達しているので3地点に分けて報告する。土層はA地区と同様である。第1地点は放光寺跡北東約400mに位置する。第1トレンチの第Ⅱ層黒色土でヘラ切りの土師器坏が出土し、柱穴が1個検出された。第3トレンチでは埋土が黒色土の東西方向に延びる溝状遺構が検出された。第2地点は、第1の東約400mに位置する。第1トレンチで埋土が黒色土の溝状遺構が検出され、青磁片が出土している。第3地点は、墓地東で第2地点の南南東約600mに位置する。第1トレンチで青磁片が出土し、第2トレンチで溝状遺構が検出された。第1～3地点では、量は少量ながら平安～中世の遺物出土し、また、溝状遺構及び柱穴が検出されたので、B地区には、平安～中世の遺跡が点在すると思われる。





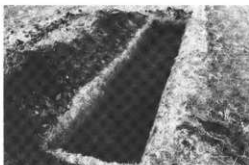
図版 4 原田・上江地区遺跡



A 地区第 1 トレンチ



A 地区第 2 トレンチ



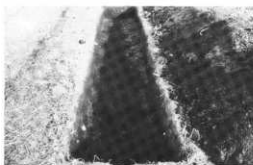
A 地区第 6 トレンチ



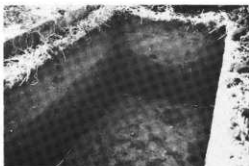
A 地区第 3 トレンチ



A 地区基本層序



B 地区第 2 地点第 1 トレンチ



B 地区第 1 地点第 1 トレンチ



B 地区第 3 地点第 2 トレンチ

## 第5節 善田地区遺跡

### 1. 遺跡の位置及び調査に至る経緯

善田地区遺跡は、串間市大字西方に所在し、標高約15mの南西へ延びる台地上に立地する。当地では、宮崎県南那珂農林振興局が広域農道建設事業を進めているが、これに伴い県教育委員会では昭和62年度より発掘調査を行っている。その結果、当地には古墳時代及び中世の集落跡等が調査されている。平成元年度はその南延長部分が事業施工予定で、遺物散布地等が所在していたため、平成元年1月24・25日の両日発掘調査を実施した。

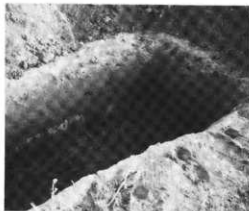
### 2. 調査の方法と概要

善田原台地は、緩やかな起伏をなしておりその頂部を中心に遺物散布が認められる。そこで調査対象地をA・B両地点に分けて調査を実施した。当地の基本層序は、第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層黒褐土、第Ⅲ層御池ボラ、第Ⅳ層黒褐色土、第Ⅴ層アカホヤ、第Ⅵ層黒褐色土であるが、第Ⅲ層は台地の谷底部にのみ堆積している。

A地点：弥生～古墳時代遺物及び中世の遺物が散布している。1m×4mのトレンチを2ヶ所設定して調査を行う。第Ⅲ層は堆積しないが、第Ⅱ層は部分的には良好に残存する。遺構は、第2トレンチで時期不詳のピットが検出された。遺物は小片が第Ⅰ層で出土したのみである。当地点は、弥生～古墳時代及び中世の遺跡で、遺構等は残存していると考えられる。

B地点：昭和62年度頂部の調査を実施し、第Ⅳ層の下層で縄文早期と考えられる焼石が出土している。本年度は、南傾斜面にトレンチを4ヶ所設定して調査を実施した。当地点は、基本層序が良好に残存するが、明治以降の遺物が出土したのみである。当地点は、頂部のみに縄文早期の遺構が残存し、南傾斜面には遺構等は存在しないものと考えられる。

図版5 善田地区遺跡

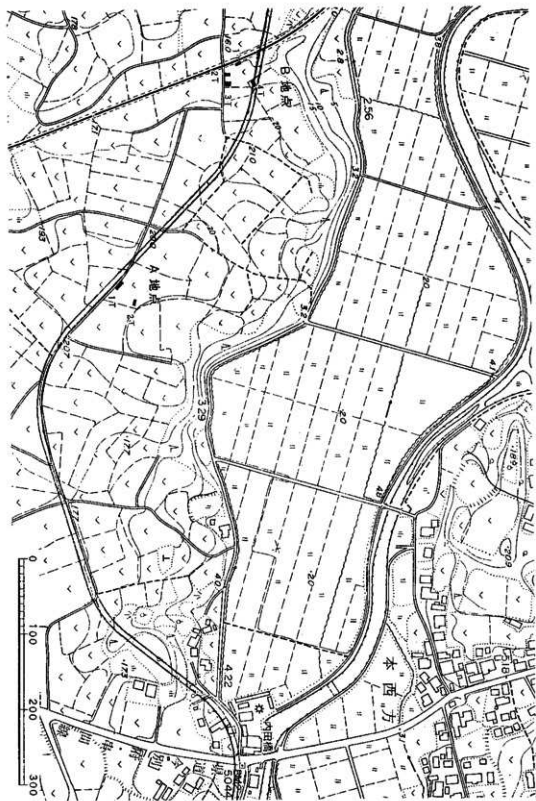


A地点第2トレンチ



B地点第1トレンチ

第6図 新田地区遺跡トレンチ配置図



## 第6節 八重地区遺跡

### 1. 遺跡の位置

八重地区は、宮崎郡田野町字乙に所在する。当地区は、田野盆地の外輪山の一部にあたる。大半がシラスを基盤とし、谷が深く標高約195mの丘陵性台地が発達しており、遺跡はこの台地上に立地する。

### 2. 調査に至る経緯

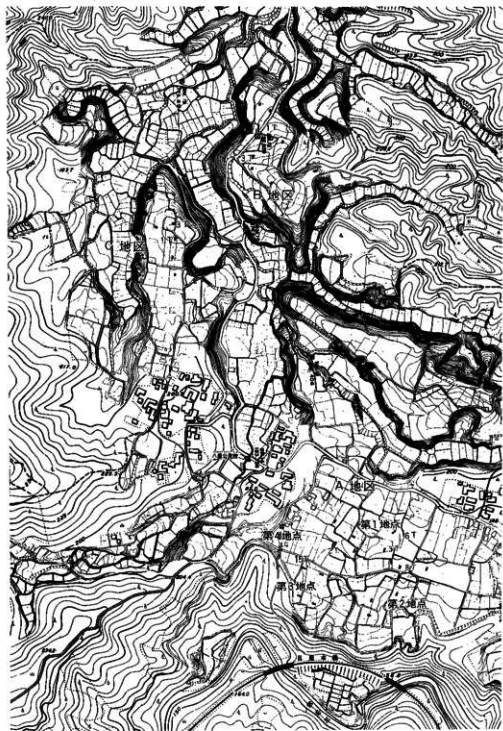
八重地区では、昭和62年度より県営特殊農地保全事業が実施されている。宮崎県中部農林振興局では、平成元年度3台地上において事業実施を計画していたので、予定地内の分布調査を実施した結果、各台地において遺物の散布が認められたので平成元年1月31日から2月4日まで発掘調査を実施した。その結果、遺跡が5ヶ所確認されたが、協議により元年度は1台地のみで事業を施工することになった。

### 3. 調査の方法と概要

A地区：八重地区で最大面積を有する台地で、台地縁辺を中心に縄文・弥生時代の遺物が散布している。調査は、1m×4mを基本としたトレンチを17ヶ所設定して行う。当地区の基本層序は、第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層黒色土、第Ⅲ層ボラ（文明ボラ？）を含む黒色土、第Ⅳ層黒色土、第Ⅴ層アカホヤ、第Ⅵ層硬質の黒褐色土、第Ⅶ層暗褐色土であるが、開墾等で第Ⅱ～Ⅳ層まで消滅している箇所が多い。第5・15トレンチの第Ⅵ層下層で縄文土器、焼石、第2トレンチで弥生土器が出土した。遺物の散布、試掘調査の結果より調査対象地内には、第1地点縄文早期・弥生時代、第2地点弥生時代、第3地点縄文早期、第4地点縄文早期、弥生時代の計4ヶ所の遺跡が所在すると考えられる。

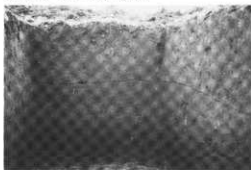
B地区：標高約195mで北東方向に傾斜する台地で平安時代の遺物が散布している。トレンチ9ヶ所を設定して調査を行う。当地は、耕土下に2次アカホヤが残存している箇所が多い。第1・3トレンチにおいて、2次アカホヤの層で平安時代の遺物、第8トレンチではアカホヤ下の層より焼石が出土した。当地区は、縄文早期及び平安時代の遺跡と考えられる。

C地区：標高約200～197mの台地である。当台地には弥生土器と考えられる土器が縁辺を中心に散布し、最高所にあたる部分では、縄文早期の貝殻土器、焼石の散布が認められる。調査は、最高所を中心にトレンチを設定して行った。その結果、最高所ではアカホヤは残存せず、耕土下は硬質の黒褐色土、暗褐色土、やや粘質の褐色土となっている。第1トレンチでは、黒褐色土で磨石・土器片が出土し、第3トレンチでは、褐色土で頁岩製の剥片が出土したので、この地点は旧石器及び縄文早期の遺跡と考えられる。



第7図 八重地区遺跡トレンチ配置図

図版6 八重地区遺跡



A地区第2トレンチ(第1地点)



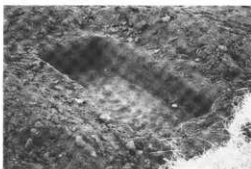
A地区第8トレンチ(第1地点)



A地区第3トレンチ(第1地点)



A地区第6トレンチ(第1地点)



A地区15トレンチ(第2地点)



B地区第3トレンチ



C地区第1トレンチ



C地区第3トレンチ

## 第7節 西河原地区遺跡

### 1. 遺跡の位置

西河原地区に今回確認された遺跡は、新富町大字新田字椎木・桜木にまたがって所在する。新田原の段丘から連なり、一ツ瀬川下流域の沖積低地との境に生じた、南向きの緩やかな傾斜地に立地する。新田原古墳群の山之坊古墳が近くにある。

### 2. 調査の概要

試掘調査は平成元年2月20日から23日まで実施した。

試掘トレンチを8箇所設定した。試掘対象地は、50年前前に耕地整理がなされているとの話であったが、それを証明するように、現道を挟む北側の高い部分では地山層の硬質黄褐色土層まで削平の手が加えられていた。しかし、深くて40cm程度、浅いもので数cmという残存状態であったが、柱穴を検出することができ、土師器の小皿を主にする遺物を供伴している。また、柱穴の密度は高い。

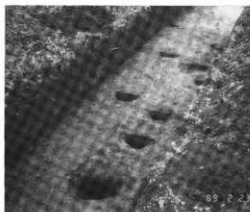
さらに、現道を挟む南側の低い谷に向けての水田面では、地表面から40～50cmで土師器の遺物包含層である黒色土層を確認し、また柱穴も検出することができている。しかし、一段ごとに低くなるにつれ黒色土層も低くなり、谷に近い部分では地表下1m程で乳白色ないしは灰白色の粘質土層となる。また、黒色土層の下には厚さ10cm程の黒灰色の砂層が堆積している。

以上のことから、遺跡の中心は現道より北側の高い部分にあったものと考えられる。さらに、やや急な傾斜で南の谷および河川に向かう部分では、河川の氾濫などにより洗われていた時期があったものと考えられる。

### 図版7 西河原地区遺跡



遺跡の近景(南東から)



第1トレンチ



第8圖 西野河斷面配置圖



## 第8節 角上原地区遺跡

### 1. 遺跡の位置

角上原遺跡は行政区では清武町大字今泉字角上で、清武川の支流である水無川の右岸の高位河岸段丘（標高50～63m、比高約30m）に位置する。段丘の平坦部は東西長さ約1.5km、南北幅約300mであり、東西に長い。

### 2. 調査の経緯

今泉地区の角上原工区は、昭和63年度から県営圃場整備事業が着手され、それに伴う発掘調査が清武町教育委員会によって昭和63年6月6日～8月27日に行われ、細石核、縄文後・晩期の土器、土師器、青磁、陶磁器などが出土し、古墳初頭の竪穴住居1軒・中世の掘立柱建物13棟・石組み遺構などが検出された。平成元年度に圃場整備事業が着手される予定の東側の地区の試掘を平成元年2月27日～3月3日に実施した。

### 3. 調査の概要

圃場整備事業を行う予定の地区の多くはジャガイモなどの作物が植えてあるためにトレンチを設定する場所が非常に限定され、普遍的にトレンチを設定することができなかった。2m×5mのトレンチを30本設定して調査した結果、基本層序は第Ⅰ層は黒褐色土層（Hue 7.5 YR 3/2・耕作土）、第Ⅱ層は黒褐色土層（7.5 YR 3/1・耕作土）、第Ⅲ層は黒色土層（7.5 YR 2/1）、第Ⅳ層は褐色土層（7.5 YR 4/3）、第Ⅴ層は黄橙色土層（7.5 YR 7/8・アカホヤ）、第Ⅵ層は橙色土層（7.5 YR 6/4・粘質）である。遺物包含層は第Ⅲ層である。第1トレンチから縄文晩期の黒色磨研土器・ヘラ切り底土師器が出土し、第2トレンチから東西方向に走る幅75cm、深さ40cmの溝状遺構が一本検出された。第21トレンチから黒色磨研土器、第22トレンチから貝殻押圧の土器・黒色磨研土器、第23トレンチから貝殻痕土器が出土している。当地区は縄文後期後半～晩期前半の時期、弥生～古墳時代、中世の時期に遺跡が営まれている。

図版8 角上原地区遺跡



第9トレンチ土層断面



第2トレンチ溝状遺構



第9図 角上原地区遺跡トレンチ配置圖(縮尺1/2000)

昭和63年度農業基盤整備事業  
に伴う遺跡調査概要報告書

平成元年3月31日

発行 宮崎県教育委員会

編集 宮崎県教育庁文化課